

色の博物誌—江戸の色材を視る・読む

—目を凝らしてじっと見てごらん、色の表情が豊かに立ち上がる—

2016年10月22日(土)—12月18日(日) 目黒区美術館

月曜休館開館時間 10:00—18:00(入館は17:30まで)

【観覧料】 一般:800[600]円、大高生:600[500]円、小中生無料

[]内は20名以上の団体料金、障がいのあるかたは半額・その付添者1名は無料

【会場】 目黒区美術館

【主催】 公益財団法人目黒区芸術文化振興財団 目黒区美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

【特別協力】 岡山大学附属図書館、山口県立萩美術館・浦上記念館

【協賛】 ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網

【担当】 降旗千賀子(学芸) 学芸係長 furihata-c@mmat.jp 03-3711-9558(学芸直通)

天野ゆかり(事務) 管理係長 amano-y@mmat.jp 03-3714-1201(代表)

153-0063 目黒区目黒2-4-36 www.mmat.jp

* プレス資料は、当館ホームページからもダウンロードできます。画像もカラーでご確認いただけます。

* 広報用画像を9点用意しております。別紙「広報用画像」をご覧ください。

【開催概要】

目黒区美術館は、1992(平成4)年から2004(平成16)年にかけて「青」「赤」「白と黒」「緑」「黄色」をテーマにした「色の博物誌」シリーズを開催し、各色、考古・民俗・歴史・美術を横断しながらそれぞれの色材文化史を紡いでいきました。その後もワークショップ「古典技法への旅」やセミナーを通じて、人と色材の関係を考えてきました。

美術館ではあまり取り上げられないテーマですが、色の原材料とその特質を知ることによって、見えてくることはたくさんあり、作品も違う方向から楽しむことができます。

このたび、これまでの研究と出会いをもとに、6回目となる「色の博物誌」を企画しました。今度のテーマは、「江戸時代の豊饒な色材」です。展示では、緑青、朱など、粒子が際立つ不透明感のある無機系の色材と、藤黄、アオバナ、紅、藍などの透明感のある有機系の色材に着目し、人の知恵と工夫により丁寧に作られてきた色料や絵の具により制作された《国絵図》と《浮世絵》で構成します。

幕府の命により各藩が総力を挙げて制作した巨大で極彩色の《国絵図》と呼ばれるグラフィックな絵地図。手の中で愛玩され、民衆の中で木版によって普及した可憐な色彩の《浮世絵》。この両極の表現において、復元作品、化学分析、江戸の画法書なども交え、様々な角度から、色を視て、読む楽しさをご紹介します。

国絵図—4点+復元作品1点、浮世絵—約30点+復刻・復元作品(立原位貫)約40点

色材 色と素材—20種、 画法書など

【開催内容・詳細】
1. 色材をテーマにした、これまでの活動

目黒区美術館では、美術表現における色材と人の関係をテーマにした展覧会やワークショップを継続的に行ってきました。特に、1992(平成4)年から2004(平成16)年にかけては、「色の博物誌」というシリーズで、「青—永遠なる魅力」1992年、「赤—神秘の謎解き」1994年、「白と黒—静かな光の余韻」1998年、「緑—豊潤な影」2001年、「黄—地の力・空(くう)の光」2004年として、それぞれの色が持つ、色材文化を取り上げた展覧会を5回開催しています。

「色」には原料となる素材があり、その素材が持っている特質が色の意味に影響していることに着目し、展覧会ごとにそれぞれの色の原料を探り、どのように絵具や色料が成立していたか、その特性がもたらす意味とその色材文化を、考古資料、民俗資料、歴史資料、美術資料を、横断しながら考察してきました。これは、原材料から見つめる「人」と「もの」の文化を考えるうえで制作した教材「画材と素材の引き出し博物館」から発展した企画です。

また、ワークショップでは、これまであまり注目されてこなかった、昔の絵具の作り方を紐解きながら再制作する企画も開催しています。その一つとして、テンペラ画家・石原靖夫氏とともに中世イタリアの技法書の翻訳本『絵画術の書』を読みながら、錬金術を思わせるような方法でラピスラズリから天然ウルトラマリンブルーの顔料を抽出する講座を数回にわたり実施、葛飾北斎が著した『絵本彩色通』から江戸時代に盛んに行われた藍の顔料を採取する「飴だし」方法に取り組んで成果を上げた立原位貫氏の指導による公開講座を開きました。さらに、絵画組成研究の第一人者である化学者植本誠一郎氏により、顔料と展色材(顔料の練り材)や支持体の関係についての連続セミナーも開催、展覧会とワークショップを通して、幅広く色と人の色材文化を取り上げてきました。

こうした活動を踏まえ、このたび来る10月22日から、今まで継続してきた調査の成果と新たな発見による「色の博物誌—江戸の色材を視る・読む」を開催し、日本人が特に大切にしてきた豊かな色の質感、素材感のある江戸の色を確認し、色をあえて見ることの楽しさを提示していきます。

2. 色材文化の華—江戸時代—透明と不透明

今回、色材文化が大きく花開いた江戸時代を基本にして二つのピックを取り上げます。

一つは、「公」としての幕府が各藩に描かせた豪華絢爛な非日常的な《国絵図》。そしてもう一つは、「民」としての大衆文化において、技術も色彩も極められ可憐で華やかな、日常的に庶民が愛玩していた《浮世絵》。この両極にある二つの世界から見えてくる、素材としての色の質と表情に注目していきます。

前者の「国絵図」は、美術の世界で紹介される機会があまりありませんが、江戸時代、幕府への献納物として各藩が精力をあげて制作した巨大な絵地図で、当時の絵画とほぼ同じ色材が使われ、厚く被覆力のある表現が認められます。この江戸時代の国絵図は、その巨大さ、豊富な色彩、描画の技術などの点で世界的にみても特筆されるべきものと考えられます。特に、その色彩の絢爛さには目を見張るものがあり、地図という機能をはるかに超えた美術的な品格、現代にも通じるグラフィック的なセンスを備えているとも言えるのではないのでしょうか。

そして、《浮世絵》は、民衆の生活文化において、極めて「私的に」手中で愛玩され、主に植物による染料系の色材により透明感のある華やかな表現へと発展し、木版の摺りによって世界が認める美しい色彩が表わされてきました。

わが国には、鉱物による色材、昆虫による色材、植物染料による色材など、渡来のものも含めて実に豊富な原料があり、それを精製して丁寧に美しい色料へと作り上げた技術があり、こうした天然の色材の一部は今も生産され使われています。これらは、粒子感のある不透明な絵の具と、透明感のある絵の具と言い表すこともでき、日本人には、それらの質感を絶妙に使い分けるグラフィック的センスがあり、こうした感性がデリケートに折重なり合って色が表現されてきたとも言えるでしょう。「目で触る」とも言える、色の質感を大切にしたい味わい方が、今回の作品資料の並置と比較によって見えくると思います。

3. 国絵図の復元模写 と 浮世絵版画の復刻・復元 から見えてくるもの

国絵図に関しては、東京大学史料編纂所を拠点とした研究チームが、原図を「モノ」として捉え、色・紙・技法などに関して、数年にわたって調査を進め、非破壊分析による科学調査によって色材理解の道が開けています。その研究の一環として、東京藝術大学大学院保存修復日本画研究室が中心になって行った、原寸の復元模写に、その研究成果をみることができます。

そして浮世絵版画に関しては、これまで、当館での色材研究とかかわりの深かった木版画家立原位貫氏(1951-2015)が、半生をかけて追及した、江戸時代の製法による絵具を使った浮世絵版画の復刻・復元作品と、その原画を取り上げます。さらに、浮世絵においても科学分析が進み、今では退色している色材がどのような色であったかについての情報についても紹介していきます。

今回の「色の博物誌」展では、原画と、緻密な研究成果による復元作品の両方を取り上げ、科学的な視点も入れ、国絵図と浮世絵版画にみられる、色と原料が放つ豊かな色彩の物質的な振幅にせまり、豊かな日本人の色材文化を再確認していきます。

【構成】

1. まずはじめに 「天然の色材にはどんなものがあるでしょうか」土や石、植物などの色材

2. 「国絵図」



幕府の命により制作された巨大な《備前国絵図》(元禄時代) 約3m×3m(紙) 所蔵:岡山大学附属図書館

岡山大学附属図書館池田家文庫より国絵図 4点

○復元・《備前国絵図》2010年 316.0×345.6

色材分析について

3. 「浮世絵」 約70点 会期中ごろに展示替えがあります



三代歌川豊国《今様見立 士農工商 職人》所蔵:町田市立国際版画美術館

浮世絵版画 鈴木春信、鳥居清長、葛飾北斎、歌川国貞、溪斎英泉、歌川国芳ほか
○立原位貫の復刻・復元作品
色材分析について

4. 江戸時代の主な色材

青——■群青、□藍、□青花、□プルシャンブルー

緑——■緑土、■緑青、■銅緑青、□草の汁

赤——■ベンガラ、■水銀朱、■鉛丹、□紅花、□臙脂

黄——□藤黄、□苋安・ズミ・ウコン、■石黄

白——■貝胡粉、■白土、■鉛白

黒——□墨 * ■粒子感のある不透明な色材、□染料系の透明な色材

5. 技法書にみる色材・絵具箱

狩野永納 『本朝画史』、西川祐信 『絵本倭比事』、宮本君山『漢画獨稽古』、

葛飾北斎 『絵本彩色通 初編』、石井研堂『錦絵の彫と摺』ほか

黒田藩御用絵師尾形家伝来の絵具箱

絵具硯箱 + 描かれた絵具箱

6. 画材の引き出し博物館(目黒区美術館企画制作)より

「天平の色」「天然岩絵具」「化学合成顔料」「新岩絵具」ほか





1_kuniezu_備前国図(慶長)



左5_ukiyo_e_喜多川歌麿「山姥と金太郎」



右6_ukiyo_e_立原位貫 復元「山姥と金太郎」



2_kuniezu_備前国絵図(元禄)



7_ukiyo_e_歌川国芳「東都名所 するがだひ」



3_kuniezu_備前国絵図(寛永)



8_color material_浮世絵の青「青花」



4_ukiyo_e_三代歌川豊国「土農工商 職人」



9_color material_絵画の顔料「緑青」

色の博物誌—江戸の色材を視る・読む 広報用画像 詳細データ

1_kuniezu

《備前国図》慶長年間(1596～1615) 329.0x280.7cm 着彩／紙
岡山大学附属図書館蔵 池田家文庫

2_kuniezu

《備前国絵図》元禄13年(1700) 316.0x357.0cm 着彩／紙
岡山大学附属図書館蔵 池田家文庫

3_kuniezu

《備中国絵図》寛永年間(1624～1644) 190.0x189.2cm 着彩／紙
岡山大学附属図書館蔵 池田家文庫

4_ukiyoe

三代歌川豊国《今様見立土農工商 職人》
安政4年(1857) 大判錦絵三枚続 町田市立国際版画美術館蔵

5_ukiyoe

喜多川歌麿《山姥と金太郎 煙草のけむり》
享和1～3年(1801～03)大判錦絵 山口県立萩美術館・浦上記念館蔵

6_ukiyoe

立原位貫 復元・喜多川歌麿《山姥と金太郎 煙草のけむり》
昭和57年(1982)大判錦絵 個人蔵

7_ukiyo

歌川国芳《東都名所 するがだひ》
天保3～4年(1832～33)横大判錦絵 山口県立萩美術館・浦上記念館蔵

8_color material

浮世絵の青「青花」 浮世絵によく使われた鮮やかで美しい青、つゆ草の栽培変種「青花」の花びらを摘み取って、搾り汁を和紙に繰り返し塗って青花紙をつくる。

9_color material

絵画の顔料「緑青」 粒度の大きさの違いによる色味。世界中の絵画に使われた天然の緑といえば、このクジャク石から採集する緑青。粒子の違いによって色味が変わってくる。細かい方が明るい。

色の博物誌 — 江戸の色材を視る・読む

宛先：目黒区美術館 〔担当〕 天野・降旗 宛て
FAX：03-3715-9328 E-mail：mmatoffice@mmat.jp

■ 本票に必要事項をご記入のうえ、上記宛先まで FAX でお申し込みいただくか、メールにて本票と同内容の事項とご希望の画像番号をお知らせ下さい。掲載紙・誌を1部ご寄贈くださいますようお願い申し上げます。

お申し込み日	年	月	日
御社名			
ご担当者氏名			
住所	〒		
TEL		FAX	
E-mail			
掲示媒体名 (雑誌名など)			
メディアの形態	【紙媒体】 新聞 / 雑誌 / ミニコミ誌 / フリーペーパー / その他 () 【電子媒体】 テレビ / ラジオ / WEB サイト / 携帯サイト / その他 ()		
発行・放送予定日	年	月	日
ご希望の画像	図版番号 1～9 のご希望の図版番号をご記入ください	使用条件等 *写真画像への文字載せは不可です。 *写真の画像加工(トリミング・色調整など)は不可。但し、 モノクロで使用の場合は、コントラスト、ガンマ値の適宜 調整を許可する場合があります。 *キャプション、クレジットは必ず明記してください。	
連絡欄			

- お申し込み受け付け後、画像データ(JPEG)のダウンロード先を返信でお知らせいたします。
お手元の環境等によりダウンロードできない場合は別途ご連絡ください。
- 使用にあたっては、【広報用画像について】の内容をご了承いただくことが条件となります。
必ずご確認くださいませようお願いします。

【広報用画像について】

- ・画像データはメールにて送付いたします。
- ・画像は展覧会紹介の目的のみにご使用ください。
- ・データを第三者に渡すことは禁止いたします。
- ・使用後、データは破棄してください。
- ・展覧会の名称、期間、会場などの情報は分かりやすく掲載してください。
- ・画像への文字載せは不可です。
- ・画像使用の際は、キャプション、クレジットを明記してください。
- ・掲載誌(紙)は1部、当館担当者までお送りください。
- ・Web サイトは公開後に URL をお知らせください。
- ・当館が掲載内容を確認できるように、掲載前に校正をお送りください。

◎ 本展を紹介して下さる媒体には、展覧会の招待券
(5組10名様)を読者プレゼント用に提供いたします。
ご希望の方は下記にご記入ください。
読者プレゼント用招待券を [希望する ・ しない]

< 広報用画像に関する問い合わせ先 >

目黒区美術館
TEL.03-3714-1201 / FAX.03-3715-9328
展覧会担当(学芸)：降旗
広報担当(事務)：天野